

株式会社クボタ 代表取締役・専務執行役員 富田哲司 / 執行役員 田中政一

# 海外で培った技術で実現された 高性能・耐久性・低価格のコンバイン

（株）クボタは今年9月、アジア共通設計のコンバインを新発売する。新機種『エアロスターワールド』では高い基本性能と耐久性を確保しながらも、絞り込んだ機能設計により、現行国内モデルより低価格を実現している。これは同社の海外向け機種を日本向けに展開する『ワールドシリーズ』の第一弾だ。機械事業本部長・機械海外本部長の富田哲司氏と、作業機事業部長の田中政一氏に、その開発意図と将来像を聞いた。

## アジア共通設計 発売の意図とは？

昆吉則（本誌編集長） 新発売されたアジア共通設計のコンバイン『エアロスターワールド』を、本誌では非常に注目しています。実は中国で御社の販売店に行ったら、中国人のユーザーが「この機械は700時間しかもたない、前回の機械は2000時間もあった」と言っているのを聞いて、耐久性が高いことに驚いていま

した。それで御社の中国仕様のコンバインを輸入して、グレンタンクを加工したり、部品調達したりしようかと読者達と話していたんです。ところが、それを御社が国内で発売されるのと聞いて、これは農機業界が本場に農業経営者という階層の経営に注目する時代が変わってきた、一つの転換点だと感じました。この流れは将来的にどうなるのでしょうか。まずはこのコンバインを発売された意図をお聞かせ願います。

富田哲司（株）クボタ 機械事業本部

長・機械海外本部長） 特別な意図というか、むしろ日本の農業の流れのなかでは当然のことです。たまたま当社がもう二十数年前から海外に出ている、そこで培ってきたことを活用しようということ。これからは日本でも低コストを志向せざるを得ない。しかも長時間使うことになれば、当社が中国で販売しているような機械がいいのではないか。もともとそういう発想です。

田中政一（株）クボタ 作業機事業部長） それと日本のプロ農家でも、韓国や中国のプロ農家でも、要望しているポイントは変わらないんですよ。そういう農業のプロの観点からは、機械はこうあるべき、こういう機械が欲しいということについて国が違って同じことを言われま

本向け、韓国向け、中国向けと区別するのはおかしいという発想です。そして中国では耐久性の技術を獲得しているから、それを日本のユーザーにも展開しようということ。『ワールドシリーズ』と銘打ってはじめてわけです。

昆 中国進出はいつ頃でしたか？

田中 98年にコンバインを投入してからです。クボタの機械を買えば、必ず一番儲かる買い物になるという観点で、製品の投入とサービス体制を作ってきたことが、的を射たと思っています。性能は当然いい、そこそこの価格、稼働率も高い、故障も少ない。それから最後に中古で販売する時も他の機械よりも高く売れる。だから最初はローカルメーカーの価格が安くても、2〜3年たてばクボタのコンバインを買ったほうが



## 富田哲司

■プロフィール (とみた・てつじ)

1950年生まれ。上智大学経済学部卒業後、73年久保田鉄工(株)(現・株クボタ)に入社。99年トラクタ輸出部長、03年クボタヨーロッパS.A.S.社長に就任。04年クボタトラクターコーポレーション社長に就任。05年取締役役に就任。09年機械事業本部長、機械海外本部長に就任、現在に至る。09年代表取締役専務執行役員に就任、現在に至る。



## 田中政一

■プロフィール (たなか・まさかず)

1952年生まれ。神戸大学大学院農学研究科修士課程卒業、77年久保田鉄工(株)(現・株クボタ)に入社。02年作業機技術第二部長。06年作業機技術第一部長を兼任。07年作業機事業部長に就任、現在に至る。09年執行役員に就任、現在に至る。

総合的には儲かるという姿が、中国で一般化されたわけです。  
昆 今、クボタの機械は中国に何台くらいあるのでしょうか。

田中 約5万台です。十数年前に売った機械が6000時間とか7000時間とか動いて、まだ使われているんですよ。どうしたんですかと聞くと、いい機械だから自分たちで修理して部品交換を続けて使いたいというわけです。

昆 中国はジョンディアもありますね、ずいぶん価格も安いようです。

田中 完全に住みわけできていません。当社は水田が中心でジョンディアは畑作ですから、コンバインで

バッティングすることはないです。価格は確かに安い。100馬力が日本円で250〜260万円ではないかな。それくらいで売らないと中国のローカルメーカーのなかで、商売できないでしょう。

### 日本の農機メーカーにはどんな可能性があるのか？

昆 私は日本農業の一番大きな可能性は、海外でのコメ生産だと思っています。日本の品種を使ってカリフォルニア米より価格が安く、品質が高く、大量供給できる農業をする。そんな農業適地がロシア沿海州やウク

ライナにあります。果たして日本の自脱型コンバインは、そこで勝っていく感じをお持ちですか。

富田 どうでしょうか、最近はずっと自脱型も進歩していますからね。自脱型のロス率は、だいたい1〜2%と言われている。一方、今我われがタイやベトナムで売っている普通型コンバインのロス率は、だいたい2〜3%です。1%しか違いません。

昆 なるほど。ただ、海外のジャボニカ米はマイナークロップですから、その対応は本当の所でできていないのでは。私はそこに日本の機械メーカーにとっての海外チャンスが広がっていると思います。実際、農家だけが

出て行ってもできるわけなくて、フリービジネスが出て行かなくてはいいない。もちろん機械メーカーも一緒です。つまり単なる稲作技術ではなく、日本のコメ産業やコメを食べる文化が世界に出て行く。そうやって御社の農機における世界展開と、日本農業の世界展開とを一体的に考えることができれば、世界に夢が広がったなという気がしています。

富田 実は当社の作業機事業部でも「世界を刈る」という言葉を掲げ、ウクライナとかカスピ海のイランの北のほうとか、地域的な広がりを目指しています。普通型コンバインでコメだけでなく何でも刈ろうと作物的

な広がりを目指し、大豆やトウモロコシ、ナタネも刈る方針です。

**昆** 海外の機械メーカーは、どんどん刈り幅や作業幅を広げていきますね。だけど一方で日本みたいな雨の多い国では、収穫機の形も風土に規制されます。だからこそアジアの水田地帯で、日本の機械が普及しているわけです。海外の機械メーカーと比べて御社には、どのような位置があるのでしょうか。

**富田** 欧米のようなメーカーは志向していません。大多数である小中規模の方々に使って頂けるものを作っていきたい。小中規模と言っても200ha前後を想定していますが、その層に需要される機械を作っていきたいと思っています。

**昆** それは逆に付加価値のあるものがつくれる規模ということですね。話を『ワールドシリーズ』のコンバインに戻します。この開発意図を将来性も含めてお願いします。

**富田** そもそも最近国内と国外という見方をしていません。むしろアジア圏という広域で捉えて、その中の日本という位置づけですから、特に深い意図があって日本に持ってきた訳ではないんです。

**田中** もともとこの機械は韓国中心で開発した機械です。『ワールドシリーズ』は海外向けに作っている機

械を日本やアジア向けに展開するというコンセプトで、その中には日本生産のものや中国生産のものがあります。今回の第一段階は日本生産のもので、中国でやってきた耐久性の技術などを盛り込んで韓国のプロ農家向けに開発した商品で、日本のプロ農家にも使って頂くということです。韓国向けですので、機能的なレベルも中国向けよりは高いです。

**昆** この機械は販売店に依存せざるを得ないレベルのメンテナンスを要するのに、何時間かかりますか？

**田中** 年間稼働時間は約700時間です。フィルター交換くらいはやつてもらいますが、それまでは大きなメンテナンスは必要ないというのが一つの基準です。

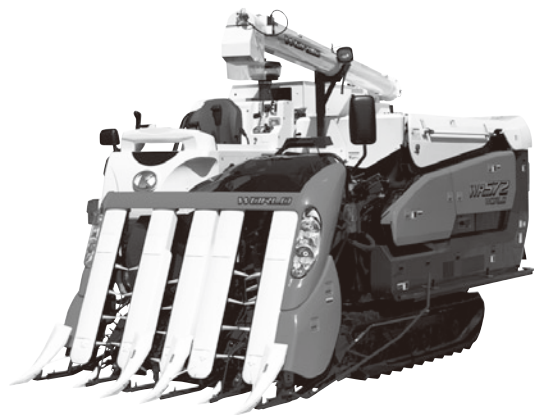
**昆** 今までのコンバインだと脱穀部の上側とか、クローラのベルトとか、いろいろ弱いところがありました。そういう所は従来と比べて耐久性があるのでしょうか。

**田中** クローラに関しては日本向けに以前作っていたものより、はるかに強力になっていますね。

### 中国製グレンタンク仕様は日本で販売されるか？

**昆** 中国の賃刈業者がグレンタンク仕様を使わないのは人件費のほうが

高性能・耐久性・低価格を実現したアジア共通設計のコンバイン『エアロスターワールドWR572M-C』。最高出力72馬力のエンジンを搭載、5条刈。希望小売価格は8,694,000円(税込)。



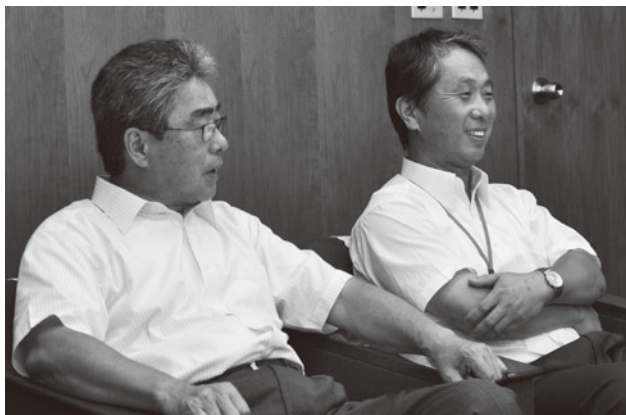
安いからだそうです。また、ロシア沿海州の中国人はテント泊で稲作をしていました。やはりあの中国人のパワーがあるから、あの機械で済むわけですよ。だから「なぜクボタは中国で売っているものを日本で売らないのか」といわれても、そう簡単ではないのもよくわかります。

**田中** ただ、今はもうかなり状況が変わってきています。最近中国でも「やっぱりグレンタンクがいい」と言うんです。何がいかとていいますと、今は賃刈業者が刈り取って袋詰めした籾を田んぼのあちこちに落として、それを農家の人たちが集めて回っている。それが大変だからグレンタンク仕様にして1カ所で受けたい。そうすれば今の刈り賃は1市

畝(1/15ha)当たり50元(約750円)ですが、70元(約1050円)でも払うそうです。そうなれば中国も韓国も日本もスペックは変わらなくなりそうです。

**昆** そうすると中国生産の機械を、日本で売ることが可能になるということですね。つまり中国でグレンタンク仕様の機械が納得されること、我われにとってもメリットがあるということでしょうか。

**田中** 中国でグレンタンク仕様が出てくるのは確実、経済的な発展とともに必然的になります。ここ3年くらいの間には出てくると思います。昆 そうなると、それとほぼ同時か1~2年の間に日本国内でもその機械の販売が始まりうるでしょうか。



田中 それも可能でしょう。  
 崑 今回のコンバインの反応はどうなのでしょうか？

田中 一部の方には非常に高い評価を頂いています。キャビンがないので南西九州・四国などではそうでもないですが、キャビンが関係ない北海道や東北などでは「こういうのを待っていたんだ」という強い声が聞かれます。間違っていないかった、という感じを強くしております。

崑 200台という販売目標は、どういう判断でしょうか。

田中 5条刈コンバインという括りからいけば、やはりキャビンが欲しい、今までのような高機能な最高級

品が欲しいという方もまだ結構おられます。一方、農業経営者として自立したい、自立した経営をやっているという人ほど、これを評価して頂いています。

崑 これは刈高さ制御がついてないですが、そういう人達には必要ないわけですね。こぎ深さは必要かもしれませんが、逆に、この形でいいからもっとパワーアップして欲しいとか、より効率を高めたいという要望はありませんか。

田中 ニーズはあるでしょう。ただ速度を上げると脱穀部のサイズも上げないとうまく処理できない。そうすると大きくなったり重くなったりして、価格も含めて考えると難しいところですね。

### 次はいろいろな条数に拡大 田植機や普通型コンバインも

崑 従来の同クラスの機種に比べて、どこが違うのか教えてください。

田中 特に耐久性をプラスしています。耐磨耗性の高いクローラ、エアクリーナ、フレームも変わっています。それから搬送部のブッシュチェーン、刈刃駆動部のダブルクラックベアリング、受網に採用した超硬ピアノ線、セラミックカッタなど。崑 では、マイナスした部分は？

田中 当社が国内で出している他の機械はミッションが電子制御式なんです。ワンタッチでクラッチを踏まなくても変速ができるという。それがこの機械ではメカミッションになっています。

崑 それはメンテナンス性が高まるということですね。

田中 まあ、そうですね。故障してもすぐに直せますね。それから細かい品種や状態に対応するために、他の機種では刈取り部の速度を独立させていますが、この機種では足回りから連動させています。それからさっき言われた刈高さ制御ですね。それから副変速なんかもワンタッチで切り替えたりできる多機能レバーを複数のレバーに戻してあります。それから水平制御ですね。他の機種は前後も左右も水平になる機能がついていますが、前後はやめて左右だけの水平にしてあります。

崑 前後の水平制御をやめても問題ないのでしょうか。

田中 前後の水平制御があると畦越えしたときなど、傾斜しないで水平にできて安心感があるんです。やめても作業上の大きな問題はありませんが片方にあるのでほとんど重くなってしまうので矯正してやらないといけない。だから作業上必要だろう

ということが残りました。いうなれば普通のプロ農家が使って絶対必要な機能は残してあります。一方、快適さの機能や適応性のようにオペレーターの習熟で解決できる部分とはってあります。

崑 本当の意味でプロ農家の期待に応えるコンバインが出ましたね。

田中 そうですね。中国のプロ農家はこぎ深さ制御さえ切ってしまう。そのかわりに、それを指先で調整できるスイッチを付けてくれ、自分でこぎ深さを調整したいと要望されています。少々ロスがあってもいい、とにかく作業効率を優先したいという一念ですね。制御はプロにとってマイナスの場合があるんです。

崑 このシリーズを広げていくとか、多様化していくご予定は？

田中 もちろんあります。第一弾として5条ですが、次はいろいろな条数に広げていく。それから普通型コンバインや田植機など、当社が持っているリソースを洗いなおし、中国や海外で展開しているもので日本で適用できるものがあれば、検討していきたいと思っています。

崑 今後日本でも規模拡大と産業化が進むにつれて、ロスを気にするよりも、スピードを上げたい要望がもっと出てくるでしょう。今日はどうもありがとうございます。